

新生子馬の蘇生方法

静内診療所 井上 哲

よもやま話シリーズ2021年3月では、子馬が生まれる際に体の中で起きている変化についてお話しさせていただきました。今回は何らかの原因で、スムーズに生きるための機能を獲得できずに産み落とされた子馬への蘇生処置について説明させていただきます。

私事になりますが妻の仕事の関係上、帝王切開で生まれた子犬の蘇生を手伝う機会があります。この場合、鼻先が少し出るように両手で優しく包み込み、遠心力で羊水が排出されるように振り下ろしたり、直接口で吸引したりします。そしてタオルで体を擦り自発呼吸を促します。大動物でも、逆さに吊るし顔を振るようにして羊水を排出させ、後頭部に冷水をかけるよう指導された記憶があります。これらは、多量に吸引した羊水による気道抵抗の改善、呼吸中枢の刺激により自発呼吸の開始を後押しするための処置と解されます。しかし、子牛ならまだしもさらに大きい子馬では苦勞した経験をされた方もいるかもしれません。十分に羊水を除去できないまま酸素マスクをあてているケースもあるでしょう。きれいな羊水であれば問題も最小限で済みますが、蘇生が必要な新生子馬においては胎便で混濁していることも少なくありません。最近では分娩時の蘇生キットとして、当初子牛用として市販された、引く押す形式の簡易型人工呼吸器も広く普及していると思われま。これを用いて蘇生効果を検証した報告においても送気（肺に空気を押し込む）よりも吸気（羊水除去）が重要で十分な羊水吸引後、空気を送り込むことでさらに良い結果（初乳からの免疫グロブリン吸収促進等）が得られたとのこと。



では一体どれくらい吸引すれば良いのかという疑問が生じます。キットの説明書には4から5回の吸引と書かれていますが、個人的には羊水性状が粘液性から泡沫性に変わったタイミングで送気に変更すれば良いのではないかと考えます。羊水中には、子馬の肺胞から分泌された肺サーファクタントというガス交換を容易にする物質を含んでおり、泡沫性の羊水はこれが活性している証だからです。ヒトの未熟児では、人工肺サーファクタントの投与で救命率が確実に上昇したと言われますが、馬への応用は費用対効果の面から現実的ではありません。今後のこの分野での発展に期待したいと思います。

